

ka 平成26年度研究成果中間報告書《平成26年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	30	都道府県・指定都市名	和歌山県	研究課題番号・校種名	2 高等学校
				教科名	看護
研究課題	新学習指導要領の趣旨等を実現するための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究 生徒の主体的な学習を通して思考力，判断力，表現力，技能を育成する指導方法などの工夫改善と学習の実現状況の把握についての研究 新設科目「看護の統合と実践」において行う研究				
ふりがな 学校名（生徒数）	わかやまけんりつくまのこうとうがっこう 和歌山県立熊野高等学校（709人）				
所在地（電話番号）	0739-47-1004				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	www.kumano-h.wakayama-c.ed.jp/				
研究のキーワード 主体的な学び（ジグソー学習法）・互恵的關係づくり・知識の統合					
研究成果のポイント 生徒の主体的な学びを育むジグソー学習法を取入れ，以下の成果を得ることが出来た。 ①各自の責任が明確になり，それを果たすために自ら考え行動できた。 ②学習活動の中から「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を仲間とともに得ることができた。					

1 研究主題等

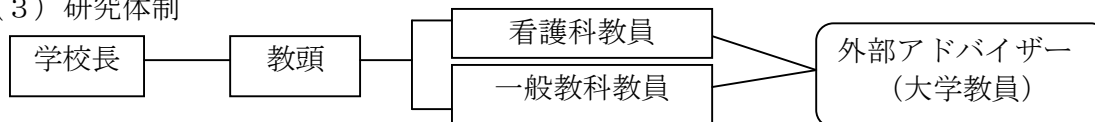
(1) 研究主題

自ら学び、考え、行動する力の育成のための指導の工夫と評価
～看護の実践への展開においてジグソー学習法を取り入れた取組の評価～

(2) 研究主題設定の理由

本校看護科の生徒は，素直で情緒豊かである。一方，学習面においては受動的で，主体的に取り組む生徒が少ない。看護の現場を体験できる看護臨地実習においても，患者の情報を断片的に捉えることしかできず「記録が書けない。」「患者さんのことがわからない。」と悩み，看護を学ぶ楽しさを得る絶好のチャンスが生かされていない。これは，既習の学習内容が統合されず，患者の全体像を捉える力が不足しているためであると考えられる。そこで，生徒の主体的な学びを育みながら，既習の知識を統合させ，問題解決能力を養う学習方法を工夫する必要があると考えた。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組

平成26年度	年・月	取組
	H26.4	1. 研究体制を整える。 1) 研究グループを編成する。(看護科教員のうち研究に主に携わるメンバー4名を決定し役割分担を実施。) 2) 研究の取組の計画を立案する。

H26.5	<p>2. ジグソー学習法について、教員の理解を深める。</p> <p>1) 和歌山大学 岩野准教授による「協同学習」についての講習会を実施。</p> <p>2) ジグソー学習法の文献検索と文献検討を行う。</p> <p>3. 研究の検証・評価の方法を明確にする。</p> <p>1) 専門家による検証・評価方法について指導・助言を受ける。</p>
H26.8	<p>2) 単元の目標に準拠した評価規準になっているか見直す。</p> <p>3) 検証・評価方法についてまとめ、教員間の共通理解を徹底する。</p> <p>4) 「協同学習」の講習会に参加する。</p>
H26.8	<p>4. 専攻科1年生で実施する「看護の統合と実践」の看護の実践において、ジグソー学習法を効果的に活用できる工夫をする。</p> <p>1) 「看護の統合と実践」の内容・方法・評価を見直す。</p> <p>2) 既習の学習内容が統合できる患者の状況設定問題を作成する。</p>
H26.10	<p>3) 「学生の考える力を育てる授業展開」の講習会に参加する。</p>
H26.11	<p>4) 主体的な学習活動ができるようグループ編成を工夫し、教師の役割を明確にする。</p>
H26.12 ～H27.1	<p>5) ジグソー学習法を活用した授業を実施する。</p>

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①主体的な学習（ジグソー学習法）の理解

生徒の主体的な学びを促すための学習方法として、アクティブ・ラーニングが効果的であるといわれている。そこで今回、ジグソー学習法を取り入れた授業の工夫について研究していくこととした。ジグソー学習法とは、例えば、まず初めに4人程度の小グループをホームグループとして編成する。ホームグループに対して、一つの課題を与える。課題を4つに分割し、一人ずつが担当する。同じ課題を担当する者同士でグループ（以下研究グループという。）を編成し、学習していく。そして、もう一度、ホームグループに戻り、学習した内容を紹介しあって、ジグソーパズルを解くように全体像を協力して浮かび上がらせる手法である。この手法は、各自の責任が明確で、活動性の高い学習法であるため、活動する生徒の理解が重要となる。そこで、ジグソー学習法を実施する前に、ねらいや教師の役割を明確にし、生徒の理解を促した。また、授業の作業手順を明確にし、生徒が見通しを立てて、安心して作業ができるよう工夫した。主体的な学習について評価するため、生徒が各自、授業終了後に「授業全体」「話し合い」「グループ活動」について振り返りを行うこととした。

②互恵的関係づくりの工夫

ジグソー学習法を効果的に行うためには、生徒全員が参加し、お互いが高められる互恵的関係づくりが大切になる。そのため学習開始前に、ホームグループの編成と学習活動のルールづくりについて工夫を行った。

③知識の統合のための工夫

取り扱う新設科目「看護の統合と実践」は、看護に関する各科目で習得した基本的な看護の知識と技術を臨床実践に活用できるよう統合させることを目的としている。そこで、年齢・性別・疾病が異なり、各科目の知識の統合が必要な事例を設定した

(2) 具体的な研究活動

①主体的な学習（ジグソー学習法）の理解

ジグソー学習法を導入する前に、生徒へ以下の4点について説明し、理解を得た上で実施した。

(ア) ジグソー学習法の目的

仲間と共に、学び合い・高め合い・認め合い・励まし合う中で、様々な角度から課題解決する。

(イ) ジグソー学習の進め方

ホームグループと研究グループの作業内容を説明し、作業手順を明確に提示した。作業の中にワークシートを記入させ自己の学びをまとめる作業を入れた。

(ウ) ジグソー学習中の教師の役割

- a 課題に対して助言はしても解答はしない。
- b 作業手順については指示を行う。
- c グループの観察は常に行う。

(エ) 授業毎に振り返りシートを記入する。

振り返りシートの内容は、授業全体が5項目、話し合いが5項目、グループが6項目の計16項目について、「とても」(5)～「まったく」(1)の数字で尺度を記入するものと自由記入欄を毎回記入させた。

② 互恵的関係づくりの工夫

(ア) ホームグループ編成について

¹⁾浅海による「主体性尺度」を引用した質問紙によるアンケートと「夏休みの課題テスト」から、やる気と知識の平均値がほぼ同じになるようホームグループを編成し、活動がスムーズに行えるよう工夫した。グループは4人1組で10グループ編成した。さらに、日頃の人間関係について担任からアドバイスを受け、調整を行った。

(イ) グループのルールづくり

ルールづくりにおいては、「ア. 個人の責任を明確にする。イ. 参加の平等性を図る。ウ. 互恵的な協力関係をつくる。」を目標に、各グループで活動のルールを作成した。学習活動中、ルールを意識して行動するよう適時助言した。

(ウ) 振り返りシートの「グループ」評価について

前回より低下した次の授業前には、必ずルールを確認するよう助言してから活動に入るようにした。

(エ) 協同学習の効果について

ジグソー学習法を取り入れることで、協同学習を肯定的に捉え、対人関係スキルが高められ、看護実践においてマネジメントできる基礎的能力が育成されると考えられる。その効果について、開始前、活動中、終了後に²⁾安永らの「協同認識尺度」を引用した質問紙によるアンケートを行った。アンケートの内容は、協同効用因子(9項目)、個人志向因子(6項目)、互恵懸念因子(3項目)の3つで、「とてもそう思う」(5)～「全くそう思わない」(1)の5件法で実施し、協同学習の効果について評価した。

③ 知識統合のための工夫

今回、年齢・性別・疾病が異なる2つの事例を設定し、各科目の知識を統合する内容とした。1事例それぞれに5グループが取組み、研究グループの人数を5人となるようにした。

事例A 29歳・女性・妊娠高血圧症候群のインドネシア人の妊婦が安心して地域で子育てができる。

事例B 40歳・男性・筋萎縮性側索硬化症の患者が安心して在宅で療養できる。

事例Aでは母性看護・国際看護・社会保障を、事例Bでは、成人看護・在宅看護・社会保障の知識を統合する課題設定とした。研究グループでまとめた内容をもとに、ホームグループのメンバーで課題解決の話合いを行い、患者・家族・医療者の立場を踏まえた退院調整カンファレンスのシナリオを作成した。それをもとにロールプレイングを行い、患者側・医療者側の立場から振り返り、課題解決のために、良かった点・改善点を考えさせるよう工夫した。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

今回の研究は、「自ら学び、考え、行動する力」の育成のための指導の工夫としてジグソー学習法を取り入れた取組を実施した。

ジグソー学習法では、協同して作業を行うため、互恵的関係を重要視し、グループの活動ルールを生徒達が作成し、そのルールを意識しながら活動した。その結果、振り返りシートの「授

業中どれほど真剣に考えたか。」は 4.51～4.85, 「グループの仲間は話し合いにどれほど参加できていたか。」は 4.41～4.72 と, 自分と仲間の学習に対する行動について良い評価となっている。ジグソー学習では, 各自の責任が明確なため, 一人一人が責任を果たすことで, ホームグループでの学習活動が活発になり, 主体的な行動が確立できていたと考えられる。

主体性を高めるためには, 「学ぶ楽しさ」を実感し自信へとつなげていくことが重要である。そのため課題設定は, 簡単に答えが出るものではなく, 興味・関心を持ち, 様々な角度から各自が責任をもって取り組まなければ解決できない, やや難解なものとした。そのため, 課題を提示した初回の授業では, 「授業内容をどれほど理解できたか。」は 3.95 と低く, 一方, 課題解決した授業では 4.67 と上昇していた。このことから, 「難しいがわくわくする。」ような, 知的好奇心が刺激される課題設定が重要であると考えられる。

課題解決のために, 学習活動の中にワークシート作成を取り入れた。図や絵を上手く活用し, わかりやすくワークシートを作成し, グループメンバーに的確に伝えることで, 思考力・判断力・表現力が高まったと考えられる。

協同認識尺度で, 「グループのために自分の力を使うのは楽しい。」は, 「とてもそう思う」が, ジグソー学習法導入前は 17.9%だったのが, 56.4%と大幅に上昇した。振り返りの自由記入欄に「課題は難しく話し合いがなかなか進まず不安だったが皆で意見を出し合い考えるのは楽しい。」の意見から, 仲間ともに「学ぶ楽しさ」を感じていることがわかる。また, 協同認識尺度の協同効用因子の 9 項目の「とてもそう思う」の平均が 60.4%から 71.8%と上昇し, 一方, 個人志向や互惠懸念を肯定する回答率は最初から低く, 個人志向因子については 2.1%から 0.9%と減少している。このことから, ジグソー学習法を始めて, 個人で学習するよりも仲間と学習するほうが, 効果があるという認識が高まっていることと, 協同学習は, 関わる全員が効果を得られると認識していることがわかる。さらに, 「話し合いを通して授業内容の理解がどれほど深まったか。」では, 3.95 から 4.46 と上昇し, 仲間とともに課題解決に向かうことで理解が深まり, 「わかる喜び」を実感できたと考えられる。

以上の結果から, ジグソー学習をとおして, 主体的で自律的な学びの取組, 確かに幅広い知識習得, 仲間と共に課題解決に向かい, 「学ぶ楽しさ」や「わかる喜び」を得ることができたと考えられる。

(2) 課題

ジグソー学習法のホームグループ・研究グループでの活動をとおして, 生徒一人一人が自ら考え行動する点では成果を得ることはできた。一方課題も明確になった。主体性の高まりとともに, 自己肯定感も高くなると予想していたが, 振り返りシートの「あなたは話し合いにどれほど貢献できたか。」は 3.49 から 4.03, 「あなたはメンバーに認められていると思うか。」は 3.62 から 4.18 と上昇しているものの, 主体性の高まりほど向上が見られなかった。自己肯定感が高まると, 困難な状況に陥っても簡単に諦めず, 努力し続けることができると言われている。向上しつつある自己肯定感をさらに高めていくことが今後の課題であり, そのための学習活動や課題設定の工夫が必要であると考えられる。

(3) 研究 2 年目へ向けての取組

自己肯定感を高めるような学習活動や課題設定を工夫していく必要がある。

【引用文献】

- 1) 浅海健一郎 「主体性尺度」 2009 九州大学心理学レポート
子どもの主体性と適応感の関係に関する縦断的研究
- 2) 安永悟・長濱文与 「協同認識尺度」 2009 協同作業認識尺度の開発
教育心理学研究